

地理学における日記調査に関するノート ー移動生活者の場所感覚に焦点を当てた調査のデザインと実践ー

住吉康大 (東京大学大学院生)

本稿では、筆者が現在進めている移動生活者の場所感覚に焦点を当てた研究において採用した日記調査、特に「応答型日記」(solicited diaries)を用いた調査の地理学における利用について国内外の研究をレビューするとともに、進行中の調査の設計から分析までの過程を詳述し、可能性と課題を示す。

日記を用いた調査は、回答者が看過する可能性がある習慣化した行動を捕捉したり、居場所を問わず複数の人を同時に対象として調査したりできる利点を有する。また、経時的に記録を残すことができるため、記憶に基づく発言等に比べて正確性を担保しやすい。さらに、調査者が参加者へと記入を働きかける応答型日記の場合、参加者自身が調査者の研究関心を一部共有し、内省的に記録を残すことができるため、個人の思考や感情などを探究するのに適している。

英語圏の地理学においてこれらのメリットを活用した研究が蓄積される一方、日本の地理学においては、既にかかれた史料としての日記を分析する研究が中心で、質的調査法の中では限定的な利用にとどまっている。これは、回答者の負担が大きいため持続可能性が低いこと、記入内容の多様性が大きく、収集したデータの分析に適切な手法が確立されていないことが主な原因であると考えられる。

キーワード：日記、応答型日記、質的調査、場所感覚、多拠点生活

1 はじめに

近年、日本では「アドレスホッパー」や「多拠点生活」などと呼ばれる、複数の拠点を移動しながら生活する人々やその暮らし方が注目を集めている¹⁾。このように生活拠点を一つに限定せず移動しながら暮らす生活(以後本稿では「移動生活」と称する)は、第4次全国総合開発計画(国土庁 1987)で提唱された「マルチハビテーション」以後、様々に呼称を変えながら、地域間格差是正に寄与する人口流動策として政策の中で断続的に議論されてきたし、海外を中長期的に転々と旅行するバックパッキングのような観光行動(大野 2007)や、明治期から行われている別荘暮らし(佐藤・澁谷 2015)、さらにはライフスタイル移住(Benson and O'Reilly 2009)とも類似した特徴を持つものであり、近年になって突然発生した現象ではない。一方、今日的な特徴としては、情報通信技術の発達やLCCに代表される安価な交通手段の普及、そして新型コロナウイルス

感染症(COVID-19)の流行に伴うテレワークの普及(国土交通省 2020)という労働環境の変化が加わったことで、より広く実現可能になったことが指摘できる。実際、特集として多拠点居住を扱う雑誌(第一プロGRESS 2020)や「複住」を冠する雑誌(英和出版社 2020)、家を持たずに移動しながら暮らす体験談(よしかわ 2019)が刊行されたり、定額制で全国各地の宿泊施設を利用できるサービスが複数開始されたりするなど、門戸が広がっている。

では、このような潮流は、現在一般的である定住や職住分離といった特徴を覆し、社会全体を変革するような影響力を持ちうるのだろうか。移動生活を実践する人々は、流動の中に住まい、地理的な位置に捕らわれない暮らし方を続けるのだろうか。

これらの問いに対して、「場所感覚」に焦点を当てることが重要であると考えられる。過去、場所は一貫して固定的な存在であり、人間の活動や記憶、経験を通して作り上げられ、アイデンティティの安定や一貫性を保持する根拠となりうるものと考えら

れてきた。しかし、人・物・情報などあらゆる事物の流動性が高まる現代社会において、場所もまた流動的で、絶えず変化する存在であると捉えられるようになっていく。

このような社会において、移動生活者は固定的な場所を自らの行動で作り変えようとし続ける特徴的な存在であると言える。したがって、彼ら／彼女らがどのように場所を認識しているのか、そして彼ら／彼女ら自身のアイデンティティや思考と場所との間に結ばれる関係を探ることが、ひいては居住形態の選択の根拠を明らかにし、現代社会における場所と人間の関係について経験的な例に基づいて論じる端緒となる。

移動生活を扱う日本国内の先行研究では、多拠点生活者と地域住民の関係を取り持つ結節点として宿泊施設の機能を検討した石井ほか(2022)や、多拠点生活者の移動パターンについてインタビューで集めたデータを基に分類した前田ほか(2022)など、少数に限られており、個人に密着し、移動の経験や複数の場所との関係による相互影響を考察するような研究は行われていない。一方、海外では、オーストラリアにおけるバックパッカーを対象とした調査を通じて Tuan (1974) の提唱した Topophilia (場所愛) に代わる Tropophilia (移動愛) と称するべき新しい場所と人の関係性が生み出されていると主張する Anderson and Erskine (2014) や、スペインのカナリア島に移住もしくは季節滞在するルーマニア人を対象に、移動を通じて独自の場所感覚を発達させているとして floating sense of place という概念を提唱する Marcu (2021) など、意欲的な試みを含む研究が行われるようになっていく。

しかし、これらの研究で用いられている手法はいずれも、深層的なインタビューと、部分的な参与観察のみである。インタビューの場合、一時点から振り返って過去の経験や感情が語られるため、回答者による解釈や意味づけが付加されている可能性が

ある。参与観察を導入した Anderson and Erskine (2014) の場合でも、旅行者と同じように研究者自らが継続的に旅行して記録を残しているものの、インフォーマントの探索を目的に旅をしている側面が強く、研究者自身の場所感覚に関しては十分に考察されていない。

移動する人々を対象とした調査手法に関して、国際的な移民研究に注目して、移動との関係性の中で場所や場所感覚を問い直す重要性を主張する Mendoza and Morén-Alegret (2012) は、先行研究の調査手法をレビューし、質的調査においては半構造化インタビューが、量的調査においては場所感覚を複数の次元に分割し、尺度を設定して問うアンケートが、それぞれ主要な手法であることを明らかにしている。一方、これらの手法の欠点として、移動行動そのものと、移動前後に形成される一連の流れ(フロー)を捉えることの困難さと、場所を閉じられたものとする前提に立つ傾向にあることを指摘し、新しいモバイルメソッド(被験者と一緒に徒歩で移動しながらインタビューを行った Evans and Jones (2011) など)を含め、多様なデータを複合して分析に取り組むべきだと主張している。このように、移動の途上における場所感覚は研究の主題としての存在感を高めている一方で、適した調査手法についての検討は依然として継続中である。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、移動しながら暮らす人々を複数同時に追跡し、各時点における行動や感情を記録するために、研究参加者に一定期間日記をつけてもらう手法を導入することとした。このように調査者からの働きかけによって書かれた日記は、「応答型日記(solicited diaries)」²⁾(Filep et al. 2018) と分類され、社会科学分野において利用が広がっているが、日本の地理学分野においては、応答型日記に基づく研究は管見の限り非常に希薄である。そこで本稿では、国内・海外における日記を用いた地理学の先行研究をレビューする

とともに、教科書的な著作における規範的な説明を紹介したうえで、実際の調査を設計し実施・分析するまでの詳細な経緯を記録する。

以下、Ⅱでは、国内と海外の地理学における日記調査を用いた研究をレビューする。Ⅲでは、筆者が現在実施している調査を事例に、設計と実施に至る経緯や、実際の状況を詳述する。Ⅳでは、収集したデータを一部示しながら、日記調査特有の利点と課題についてまとめる。Ⅴでは、全体の総括を踏まえて、今後の研究に向けた展望を述べる。

Ⅱ 先行研究における日記調査の利用

1. 日本の人文地理学における日記調査

成瀬ほか（2007）が論じたように、日本の地理学において言語資料を分析する研究は増加傾向にある。しかし、同論文で言語資料を分析した研究として紹介された53本の論文の中で、日記が扱われているものは存在しない³⁾。

表1は、成瀬ほか（2007）が対象としたものと同じく「日本の地理学主要学会誌」（同：568）である『地理学評論』『人文地理』『地理科学』『地学雑誌』『歴史地理学』の5誌を対象として、「日記」または「日誌」または「diary」を含む論文を検索し、抽出された書誌情報を一覧表としてまとめたものである。

これを見ると、柴（1994）、岡本（1995）、片岡（2014）の3本と、調査報告である横山（1893）、篠本（1895）、天外（1902）、井上（1902）、志保井（1953）の5本を除き、ほぼすべてが史料として過去に書かれた日記を分析対象としている。前者の3本はいずれも日常生活における行動を時間軸に合わせて詳細に記録する活動日誌をつけてもらうことにより、日常生活の時空間的な展開や都市構造（柴 1994）、都市のデイリー・リズムと個人の行動による相互作用（岡本 1995）、エスニック集団の成員が持つ特徴や課題（片岡 2014）などそれぞれ

の関心事項に取り組む研究である。このような調査法では、回答者による自由な記述や解釈の余地がなく、事実に即した緻密な記録を求めている。このような調査法は、日記の中でも特に記録日記（Diary-Logs）（Latham 2016: 160）に属するものであり、どちらかと言えば定量的な分析に適した手法である。したがって、本研究の主題である場所感覚など、質的な情報を重視する研究で用いられる日記とは性質が異なる。

また、史料として日記を利用する研究では、過去の気候についての再現を目的とした自然地理学的な研究も含まれ、こちらも定量的な分析を主としている。日記の内容を質的に検討する研究の大半は歴史地理学的な研究であり、目的に応じて新たに書いてもらった日記を分析する研究は表1中には存在しない。

学会誌に投稿された論文以外では、管見の限り滝波（2005）による「風景日記」の研究が応答型日記を用いた質的な研究の代表例として挙げられる。同研究は、高知県在住の6名の女性に対して1年間、何らかの風景が印象に残った日に限って、文章として風景を記録する「風景日記」をつけてもらうことを依頼し、使用される語彙の頻度や、記述された内容と時期から判断される季節性、そして記憶やアイデンティティとの関連などを、豊富な直接引用と綿密な分析から描き出している。

このように、自由記述を含んだ応答型日記を活用した研究が普及しない背景には、単純な活動記録に留まらず、主観的な情報が記載された日記を分析する場合、実際の記述の引用などで膨大な紙幅を要するため学術雑誌への投稿が難しいことや、収集した情報の分析手法が確立されていないこと、先行研究が少ないために方法としての可能性が十分に認識されていないことが影響していると考えられる。

次節では、英語圏地理学で地理学の一手法として事典や教科書的な著作に掲載されている日記調査

表1 日本の地理学主要雑誌における日記を利用した論文一覧

著者名	論文名	雑誌名	年	巻	号	ページ
片上 広子	近世における石狩地域の動態	人文地理	1993	45	6	603-617
天野 太郎	大坂石山本願寺内町プランの復原に関する研究	人文地理	1996	48	2	128-147
谷崎 友紀	旅人の属性にみる名所見物の特徴：武蔵国から京都への旅日記を事例として	人文地理	2017	69	2	213-228
竹内 祥一郎	貝原益軒による藩撰地誌の編纂と地理的知識の形成	人文地理	2020	72	1	1-20
原 遼平	明治後期の資産家層が見た瀬戸内海の風景：明治34年西日本旅行を事例に	人文地理	2022	74	1	27-45
横山 又次郎	秩父地質巡検旅行日記	地学雑誌	1893	5	4	157-164
横山 又次郎	秩父地質巡検旅行日記	地学雑誌	1893	5	2	51-58
横山 又次郎	秩父地質巡検旅行日記	地学雑誌	1893	5	3	101-107
篠本 二郎	熊本縣下球磨郡地方旅行日記	地学雑誌	1895	7	8	446-450
篠本 二郎	熊本縣下球磨郡地方旅行日記	地学雑誌	1895	7	7	388-391
天外 生	南島島航海日記	地学雑誌	1902	14	10	683-690
井上 禧之助	臺灣の地質調査	地学雑誌	1902	14	7	448-458
志保井 利夫	イランの旅の日記から	地学雑誌	1953	62	2	84-94
三上 岳彦	特集 日本の小氷期 日記天候記録から推定した小氷期後半の夏期気温変動	地学雑誌	1993	102	2	144-151
福岡 義隆	特集 日本の小氷期 古日記による小氷期の気候復元に関する年輪気候学的研究	地学雑誌	1993	102	2	119-124
榎本 隆充	榎本武揚の流星刀製作と「流星刀記事」/シベリア横断旅行と『シベリア日記』	地学雑誌	2003	112	3	453-457
福岡 吉美	「弘前藩庁日記」のデータベース化とその意義	地学雑誌	2018	127	4	565-568
谷岡 能史	因府年表の天候記録に関する一考察	地学雑誌	2018	127	4	553-564
平野 淳平・三上 岳彦 ・財城 真寿美・仁科 淳司	ヘボンの気象観測記録からみた横浜における1863-1869年の降水量変動	地学雑誌	2018	127	4	531-541
市野 美夏・三上 岳彦 ・増田 耕一	日記天候記録から推定した日本における19世紀前半の日射量変動	地学雑誌	2018	127	4	543-552
GROSSMAN Michael J. ・財城 真寿美・三上 岳彦 ・MOCK Cary	1877年に日本に影響をおよぼした台風の復元	地学雑誌	2018	127	4	457-470
鈴木 純子	伊能忠敬の測量事業にともなった学術的交流	地学雑誌	2020	129	2	161-179
柴 彦威	中国都市住民の日常生活における活動空間：蘭州市を例として	地理科学	1994	49	1	1-24
三上 岳彦	気候変動と飢饉の歴史：天明の飢饉と気候の関わり	地理科学	2012	67	3	121-128
千葉 徳爾	猪・鹿の捕獲量の地理的意義—近世岡山藩の場合—	地理学評論	1963	36	8	464-480
杉浦 芳夫	地域体系との関連でみた江戸明和期の“御蔭参り”の空間的拡散	地理学評論	1978	51	8	621-642
有蘭 正一郎	19世紀中頃の農事記録にみる南九州の土地利用方式	地理学評論	1985	58	12	789-806
村田 昌彦・吉野 正敏	日本における梅雨季の降水量変動の復元	地理学評論	1988	61	8	643-656
小笠原 洋子	1830年代および1840年代の江戸における夏季の降水状況の推定	地理学評論	1990	63	9	593-605
東村 康文	19世紀前半にみられた東アジアにおける夏季の寒帯前線帯の南偏	地理学評論	1990	63	9	577-592
東村 康文	19世紀前半における日本の自然季節の長短と季節進行	地理学評論	1992	65	8	619-634
岡本 耕平	大都市圏郊外住民の日常活動と都市のデイルー・リズム	地理学評論	1995	68	1	1-26
小笠原 洋子・野口 佳一	ファジイ線形回帰式を導入した古日記の降雪日数による気温推定—京都における1・2月の月平均気温の復元—	地理学評論	2000	73	5	459-467
平野 淳平・大羽 辰矢・森島 済・財城 真寿美・三上 岳彦	山形県川西町における古日記天候記録にもとづく1830年代以降の7月の気温変動復元	地理学評論A	2013	86	5	451-464
片岡 博美	ブラジル人は「顔の見えない」存在なのか？—2000年以降における滞日ブラジル人の生活活動の分析から—	地理学評論A	2014	87	5	367-385
平野 淳平・三上 岳彦 ・財城 真寿美	広島の日記天候記録による1779年以降の夏季気温の復元	地理学評論A	2018	91	4	311-327
村田 昌彦	日本における梅雨季の長期変動について	地理学評論B	1987	60	2	179-194
三上 岳彦	天候記録にもとづく歴史時代の気候復元	地理学評論B	1988	61	1	14-22
安藤 哲郎	平安貴族における「京」の認識：日記の検討を通して	歴史地理学	2011	53	2	1-24
渡邊 英明	日記史料に現れる近世後期農村住人の定期市利用：武州多摩郡中藤村の指田藤詮を中心に	歴史地理学	2013	55	4	1-17
青野 靖之	京都の桜満開日記による歴史時代の気候復元	歴史地理学	2013	55	5	48-52
平野 淳平・三上 岳彦 ・財城 真寿美	古日記天候記録による19世紀以降の気候復元	歴史地理学	2013	55	5	39-47
吉村 稔	古日記天候記録のデータベース化とその意義	歴史地理学	2013	55	5	53-68
佐伯 安一	近世中期における庶民の伊勢・京参り：越中砺波郡矢木村宗四郎を事例として	歴史地理学	2014	56	1	50-59
西海 賢二	霊山登拝の旅日記に人生儀礼を読む：富士山を中心にして	歴史地理学	2015	57	1	14-24
安藤 哲郎	平安貴族における「京」と「洛」	歴史地理学	2016	58	5	19-38
谷崎 友紀	近世初期の歌枕を中心とした京都見物：石田常軒『所歴日記』を事例として	歴史地理学	2018	60	3	1-17

成瀬ほか（2007）を参考に筆者作成。

についての解説をまとめる。続いて、自由度の高い記述が可能な応答型日記を用いた英語圏地理学における研究成果をレビューし、実際の活用の在り方や、調査法としての到達点と課題を明らかにする。

2. 英語圏地理学における応答型日記

1) 日記調査の概説と批判的検討の現状

本項では、Latham (2016) と Meth (2009, 2020) における日記調査の概説をレビューし、英語圏地理学で用いられている調査手法としての日記に関する規範的な内容についてまとめる。

Latham (2016) は、地理学における調査手法をまとめた教科書的著作である Clifford et al. (2016) 中の一章にあたる。著者の Latham は、地理学の文化的な方向への理論的転回と経験的な研究とのずれを問題視し、パフォーマンスを重視して地理学の地平を広げる方法論を模索する中で、日記を通じて日常の何気ない実践を分析した Latham (2003) をはじめ、地理学での日記調査を理論的にも経験的にも先導してきた。

Latham (2016) はまず、個人の日々の生活のリズムや構造、社会的な実践の頻度、他の出来事との関係等を理解しようとする研究で日記調査が有用だと述べ、インタビュー調査やアンケート、参与観察などと比較した利点を以下の8点にまとめた。

- ①習慣化した行動の記録も残せる。
- ②即時性が高い記録のため、詳細で信頼性が高い。
- ③参加者が調査者の代理としての役割を果たす。
- ④参加者が実践や出来事に対して自覚的になる。
- ⑤参加者が出来事や活動の広い意味を考え、自らの人生をシステム的かつ持続的に振り返る。
- ⑥調査者の想定しない事項が提起されることがある。
- ⑦個人的な問題を説明し考える機会をもたらす。
- ⑧参加者の示す理論や説明が調査者の助けになる。

このうち、④以降の利点については、特に日本の地理学では調査のために設計された日記を用いる研究が少ないこともあり、十分考慮されてこなかった。しかし、参加者が調査目的を理解し内省を通じて残した定性的な情報は貴重である。場所感覚に接近する本研究では、個々の実践や事物との関係性が重要な意味を持つため、④以降の利点が特に発揮されると考えられる。

次に、Latham は手法を表2のように分類し、利点や課題を示している。

表2 Latham (2016) で紹介されている日記調査の様々な手法

名称	内容	利点	課題
記録日記 Diary-Logs	特定の活動について可能な限り正確に、定められた通り詳細に書き記す	信頼性の高い量的なデータを得られる	日記をつける人による解釈の余地がない
手記的日記 Written Diaries	記録の内容に関する規定の度合いは多様だが、書き手が比較的自由に書いてよいもの	調査者・回答者ともに自由度が高い	回答者による差異が激しい
写真日記 Photographic Diaries	使い捨てカメラを回答者に渡して写真を通じて人生の要素を説明してもらう	回答者の識字能力を問わず、簡単に収集できる	単体では難しく、実際には文字の日記と併用される
映像日記 Video Diary	1日の出来事をカメラの前で話す動画を撮るか、1日の重要な出来事自体を動画として記録する	時間的な広がりや動きを記録できる	負担が大きく、費用や機器の操作能力の問題も生じる
日記-インタビュー Diary, Diary Interview	日記を書いてもらったうえで、それに基づいて深層的なインタビューを行う	曖昧な点を確認し付加情報を得られる	(特に言及なし)

Latham (2016) から筆者作成。

筆者が行う研究では、参加者の情緒的な記述も得られるよう、自由度を持たせた手記的日記の手法を採用し、調査期間外の経験についてインタビューも複合することで補足的な情報を収集する。この際、調査設計にあたっては、Latham が以下の 6 点にまとめた注意事項にも配慮した。

- ①日記で集める情報の取捨選択を慎重に行う。
- ②参加者の募集と採用プロセスを十分検討する。
- ③参加者の言語能力や社会的地位に応じて対応する。
- ④書く内容の説明会を開き、書類も添付する。
- ⑤記録に必要な物品は提供する。
- ⑥日記を簡単に返送する手順を考える。

本研究では協力主体との関係によって②の募集・採用プロセスの部分に制約が加わったため、全事項に対応することはできなかった。得られたデータの解釈では、この点について説明し、影響を意識した考察が必要である。一方、得られた情報の処理について Latham は以下のような限定的な言及にとどまっている。

記録日記 (Diary-Logs) のように記入事項を詳細に規定した日記の場合は、量的なデータとして分析することを推奨し、自由度の高い日記は、インタビューなどの質的データと同様に対応できるとして、NVivo や Ethnograph などの質的研究ソフトウェアの利用を提案している。ただし、記述の内容や質が幅広い事に注意し、短い記述を軽視したり、多弁で協力的な者の記録だけに気を取られたりしないように十分な準備と検討が必要である。そして、得られた記述を説明して示す段階が最も困難であり、単純な方法は存在せず、分析の方法については様々な戦略を検討する必要があるという。

この「様々な戦略」の部分が研究者の創意工夫にゆだねられていることは、質的調査の中でも特に日記調査が

広く採用されない原因の一つであると考えられる。

最後に、Latham は十分に注意を払っても回避できない日記調査の限界を以下の 3 点にまとめている。

- ①負担が大きく、協力を断られることもある。
- ②書き手の個人的な能力や状況に大きく左右される。
- ③日記の質や深さに大きなばらつきがあるが、十分な記述にも等しく目を向けることが重要である。

本研究の調査設計に当たっては、①に対応するため企業と協力してインセンティブを設定した。②と③については、調査の中で実際に大きな障壁となったため、インタビューなど他の手法も組み合わせることで可能な限り多くの情報を得るための対策を講じている。

次に、人文地理学分野の事典である *International Encyclopedia of Human Geography* (1st ed. Kitchin and Thrift 2009)、およびその第 2 版である Kobayashi (2020) の両方における日記の項を概観する。両方の版で執筆を担当している Meth は、南アフリカにおいて暴力の被害を経験した女性への調査に日記を用い、地理学的な調査手法として、さらにはフェミニスト的な観点からエンパワメントに資する手法として、応答型日記の可能性を提起するなど (Meth 2003)、Latham とは異なる観点で日記を活用した研究を続けている。

表 3 は、第 1 版と第 2 版それぞれでの章節構成と内容をまとめたものである。内容の順序は大幅に入れ替わっているが、各節ごとの内容は第 1 版のものを第 2 版にそのまま引き継いでいる部分が大半を占める。灰色に網掛けされている節は、ほぼ全ての記述が両方で共通していた。したがって、本項では、第 2 版に沿って、新たに追加された内容を重視しながら概説する。

まず導入部では、交通やモビリティ、水資源管理、健康や食事習慣、日常生活など多様な研究で日記が活用できるとし、非応答型と応答型に分けて解説を始める。研究の具体例が第2版では増補されていることから、日記を利用した研究の広がりが伺える。

非応答型日記は、いわゆる史料のように、調査者からの依頼に基づかずに書き記されたものを指す。フェミニスト地理学の観点から女性の旅行者や探検家の声を地理学に導入できるという利点を述べた上

で、第2版では、オンライン上に残された記録の活用にも言及している。さらに、史料として保存されている日記は閲覧や利用が難しく、個人的な目的で書かれているために倫理的問題があることを挙げ、他の文書や統計などとのトライアングレーションを推奨する旨が追記されている。次に、応答型日記は調査者の関心に沿った内容が記録されるもので、日記の書き手は調査者の主観性も一部内包すると指摘する。第2版ではさらに、「分析されるもの」

表3 *International Encyclopedia of Human Geography* の日記に関する既述の変遷

Meth (2009)		Meth (2020)	
表題	日記 (映像、音声または記述) Diaries (Video, Audio or Written)	日記、手書き、オンライン、音声、または映像 Diaries, Handwritten, Online, Audio, or Video	
章 節 構 成	用語解説 Glossary		
	はじめに Introduction	(はじめに) ※表題なしの序文	
	著作物優勢の状況と「オルタナティブな手法」の出現 The Dominance of Written Contributions and the Rise of 'Alternative Techniques'	Solicited or Unsolicited? A Crucial Distinction	
	映像日記 Video Diaries	Unsolicited Diaries	
	音声日記 Audio Diaries	Solicited Diaries	
	写真 Photography	Forms of Solicited Diaries	
	絵日記 Illustration-Based Diaries	Researcher Diary Keeping	
	ブログに基づく日記 Blog-Based Diaries	手書きを越えて：「日記を書く他の手法」 Beyond Handwriting: "Alternative Techniques of Diary Keeping"	
	異なる手法の使用で生じる問題 Issues Arising Out of Using Different Techniques	Video Diaries	
	応答型か非応答型か？重要な区分 Solicited or Unsolicited? A Crucial Distinction	Audio Diaries	
	非応答型日記 Unsolicited Diaries	写真日記 Photographic Diaries	
	応答型日記 Solicited Diaries	Illustration-Based Diaries	
	応答型日記の形式 Forms of Solicited Diaries	オンライン日記 Online Diaries	
	調査者による日記 Researcher Diary Keeping	Issues Arising Out of Using Different Techniques	
	日記を書くことの政治性—エンパワメントへの潜在能力？ The Politics of Diary Keeping—The Potential for Empowerment?	The Politics of Diary Keeping—The Potential for Empowerment?	
	日記を書くことと他の方法論的なアプローチの複合 Combining Diary Writing with Other Methodological Approaches	Combining Diary Writing With Other Methodological Approaches	
	解釈と分析 Interpretation and Analysis	Interpretation and Analysis	

網掛け部分は記述の大半が双方で共通している。
Meth (2009, 2020) から筆者作成。

として書かれることを考慮する必要性と、個人的で機密性の高い情報が含まれるため、匿名性を確保する重要性について言及が加わっている。

続いて、応答型日記の種類が解説される。時系列的に構造化され事実に即した正確な情報を得やすい量的な形態と、自由記述を中心として個人的な感情や経験を記録できる質的な形態に分けた上で、第3の形態として調査者自身がつける日記についても紹介している。研究活動や感情を記録することによ

表4 Meth (2020) で紹介されている日記調査の様々な手法

名称	内容	利点	課題
映像日記 Video Diary	特定の部屋等での行動を録画、または参加者の私物や調査者から提供した媒体で動画を記録	特定の部屋等で実施すると状況を設定できる。参加者が楽しみながら記録できる	映像に記録されていない部分のデータを得られない
音声日記 Audio Diaries	記録媒体を持ち運ぶ、または特定の場所で記録	匿名性を確保しやすく、識字能力の問題を克服できる	考えを口に出すことに不快感を感じる人がいるほか、文字起こしの負担やアクセント・方言の理解が障壁
写真日記 Photographic Diaries	文字の日記と組み合わせ、場所の特性や物質性などの重要性を研究するのに適する	調査者が入れない空間の視角情報を得られる	後日説明の機会が必要。日記であるかどうかについては議論の余地がある
絵日記 Illustration-Based Diaries	社会地理学や文化地理学、特に子どもの発達に焦点を当てた地理学で利用	子どもを対象とする研究の場合、出来事や場所についての説明を助ける	文脈についての理解を欠くと、過剰に解釈して他の可能性を排除する危険性がある
オンライン日記 Online Diaries	ブログなど公開されたものだけでなく、アプリ等の発達で利便性と機密性が向上している	幅広く参加者を募ることができ、文字起こしの手間も省ける	機能的な制約や、どこまでを日記とするかという定義の問題もある

Meth (2020) から筆者作成。

て、方法論的な実践や研究全体の主張に対して重要な示唆を得られる可能性があるという。

これら応答型日記の利点には、①一時点での見方ではなく通時的なデータを捉えることができること、②記憶に頼る振り返り型の手法よりも記録の正確性という点で優位性があること、の2つを挙げている。

次に、書く以外の日記について表4に示したようにそれぞれの特徴と課題がまとめられている。

ほとんどの内容が第1版と共通しているが、第2版で新たにオンライン日記 (Online Diaries) の節が設けられた。第1版ではブログに基づく日記 (Blog-Based Diaries) というタイトルで、個人のブログに短く言及しているのみであったが、媒体の多様化に対応して大幅に解説が増加している。

その後、Meth 自身の研究の特徴である日記調査を介したエンパワメントの可能性が2点まとめられる。第1は、トラウマや罪悪感を伴う経験を他者と共有することで負荷の大きな記憶から解放される可能性があること、第2は、参加者が自らの活動を見直し、認識以上にうまく対応していることに気づけることであり、それぞれフェミニスト地理学の成果を例に説明している。一方で、日記の利用が参加者に前向きな影響を与えることもあれば、反対にストレスや後ろ向きな影響を与えることもあることには留意が必要である。

続けて、インタビューやGISなど様々な手法と組み合わせて日記の記述についての理解を深めることができるが、参加者が時間を費やすことに注意し、場合によっては報酬の検討も必要であるとする。

最後に、解釈と分析については「しばしば見落とされている」と述べ、分析の形態は研究の課題や理論的なアプローチによるため、統一された説明は存在しえないと指摘する。質的な日記の場合、テキスト分析のアプローチを用いて、コード化を行い、解釈と一貫したストーリーや主張を引き出していくという手

順を示し、日記が書かれた文脈が重要になるとしている。また、書かれていることは真実や人生全体ではないため、ほかの手法と組み合わせて信頼性を高める必要がある。映像や写真を用いた手法ではより慎重に分析技法を考えなければならないとする。

量的な日記では、統計的な技法を利用でき、オンラインの日記ソフトであればより簡単に分析できるツールが存在する。しかし、質的な日記以上に、サンプリングの手続きや統計的な分析技法の選択を慎重に行わなければならないという。

まとめとして、日記を利用する地理学者は分析するデータから省かれたり排除されたりしている事項を批判的に自覚する必要があると主張して結んでいる。

以上、2つの教科書的な著作を参照しながら日記調査の位置づけについてまとめた。手法として、素朴なノートとペンによる手書きの日記にとどまらず、様々な媒体を利用することが可能となり、利用可能性は大きく広がっていることが示された。しかし、分析に際して、厳密な記録を求める形式の日記では、統計的な処理など既に確立されている技法を適用できる一方、自由な記述を容認する日記では、質的な分析に際してそれぞれの研究者が理論的アプローチと解釈を熟考しなければならず、明確な指針は存在しないことが共通して指摘されており、課題として浮き彫りとなった。

次項では、日記調査の厳密性について問題提起した論文を紹介したうえで、厳密性の確保という観点から、応答型の日記を手法として採用する近年の質的研究をレビューする。

2) 日記調査を用いた地理学の研究例

本項では、応答型日記を用いた調査の厳密性を高めるための批判的論考 (Filep et al. 2018) を紹介したうえで、実際に応答型の日記を用いた近年の地理学的研究をレビューし、到達点と課題を明らかにする。

Filep et al. (2018) は、人文地理学における質的研究の厳密性を評価する指標を提唱したBaxter and Eyles (1997) を参考に、近年社会科学全体での利用が広がっている日記調査の厳密性を維持するための枠組みを構築しようと試みている。表5は、2003年から2014年までの間に発表された日記を利用する社会科学分野の論文43本について、厳密さを確保するための戦略をどの程度満たしているかをまとめたもののうち、人文地理学分野の研究について抜粋し、各研究の主題と概要をまとめたものである。

人文地理学における日記を用いた研究では、特に「11. 分析の手順」についての記述が欠落しているものが多いことから、前項で示した Latham (2016) Meth (2020) が述べていた通り、質的な記述を含む日記の分析について課題があることが再確認できる。

さらに、Filep らは研究を設計する際の指針としやすいような形でより分かりやすく基準を表6のようにまとめた。基本的には表5の内容と共通しているが、2つの変更が加えられている。1つ目は「9. ラポールと明快さ」であり、変更前の「再訪」よりも広く事実確認やラポール形成についての方法を認めている。

2つ目は「12. 再-提示」であり、データが調査者と参加者の両方によって共同で構築されていることを認識し、調査者が改めて提示する際には参加者の意図と厳密に一致しないことを意識して変更された。なお、これらはすべての研究に当てはまる規則ではなく、あくまで調査設計の指針であると述べられている。

これら12の基準に基づいて、2014年以降に発表された応答型日記を用いる地理学分野の研究として4本の研究⁴⁾ (Vanolo 2014; Qviström et al. 2020; Linn 2021; Coen 2021) をレビューしたい。

Vanolo (2014) は、自らが経験した抑うつ状態と、精神分析を用いた治療の過程で記した日記に基づいて、精神分析治療の空間性を地理学的に考察してい

表5 2003年から2014年までの応答型日記の利用において質的な厳密性を確立する既存の戦略

	概念的枠組み		方法論的な論拠						意味の共同構築と再・提示				主題	手法
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
Bijoux and Myers (2006) Duffy and Waitt (2011) Dummer et al. (2008) Heller et al. (2011) Holloway (2003) Latham (2003) McGuinness (2009) McGuinness and Simm (2005) McGregor (2005) Meth (2003) Meth (2004) Meth and McClymont (2009) Middleton (2009) Morrison (2012) Murray (2009) Myers (2010) Park (2009) Thomas (2007)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日常生活における身体と場所 音や音楽を通じた場所の構築 フィールドワークの質向上	写真と日記の複合 音の録音とインタビュー 学生の調査振り回り日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	質的調査の能力向上	学生の日記とインタビュー
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日常の中の神秘性や聖性の検討	ニューエージェによる日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日常的な実践の分析	日記と写真・インタビュー
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	フェミニスト地理教育	学生の日記 (授業課題)
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	国際的フィールドワークの検討	学生の調査振り回り日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	動物保護と住民生活の対立	現地調査と漁師の日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日記調査の可能性と課題	被暴行経験ある女性の日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日記調査の可能性と課題	被暴行経験ある女性の日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	男性性研究のための質的手法	インタビューと日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	徒歩の時間・空間性を持つ影響	写真日記とインタビュー
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	日記調査の利点と限界	異性愛のカップルの日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	モバイルで視覚的な手法の検討	動画撮影とインタビュー
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	HIV 陽性患者にとつての場所	写真撮影とその注釈作成
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	地理の授業への参加意欲向上	学生による学習日記
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	HIV 関連の患者が持つ感情	患者による日記と写真

1. 概念的または理論的なアプローチが明確に述べられている
 2. 発見によって既存の理論が支持 (または反論) されている (例えば、研究が単なる文献の参照で終わらない)
 3. 応答型日記が研究上の問いに対応するために最も適切な (あるいは唯一の) 方法であると主張されている
 4. 日記と組み合わせる追加的な手法が用いられている
 5. 日記のデザイン/構造、参加者の説明、インセンティブなどの採用について方法論的な詳細が述べられている
 6. 調査者が参加者や研究との関係の中に位置づけられている (または、最低限、日記の書き手に対する調査者の潜在的な影響を認識している)
 7. 参加者についての理解 (例えば、年齢、性、社会・経済的状況など) が示されている
 8. 応答型日記の利用についての再帰性が表現されている
 9. 日記をつける過程の最中または後、あるいはその両方において、断続的に再訪またはインタビュー、あるいはその両方を (明確化やさらなる説明のために) 行った
 10. 解釈/意味の確証が論じられている (たとえば、複数手法によるトライアンギュレーションまたはデータ収集後の再訪を通じて)
 11. 日記 (および補足的な手法) からのデータがどのように理論的な構成物に変換/要約されたかが示されている
 12. 最終的な意味の構成物において個人が「発言権を持つ」ことができるように、参加者の日記からの直接引用が用いられている
- 本表は Baxter and Eyles (1997) の研究を参考としている。構造や用語は同研究の「地理学的研究において質的な『厳密さ』を確立するための戦略」の表から適用した。Filep et al. (2018: 454) を基に筆者作成、各研究の主題や手法については筆者が原文を確認して追記した。

表6 応答型日記を用いる際に調査者へ再考を促す12の問い

基準	問い
概念的 枠組み	1. 概念的なアプローチ 概念的または理論的なアプローチがどれだけ明示的に述べられているか
	2. アカデミックな聞き手に対する明快さ 示された何らかの理論的または概念的なアプローチがどの程度研究に関係し、なされる解釈を理解するために利用（単なる参照以上に）されているか
方法論的 な論拠	3. 方法論に対する合理性 リサーチクエスションに取り組むにあたってなぜ応答型日記が最も適切な（あるいは唯一の）方法であるのかについての主張がどれだけ信頼できるか
	4. 複数の手法 日記と組み合わせで用いられる何らかの追加的な手法によって得られる利点とつながりとは何か
	5. 日記の実践 募集、日記の設計／構造、参加者への説明、インセンティブなど、方法論的な詳細が示され、正当だと理由付けされているか
	6. 調査者と助手のポジショナリティ 参加者および研究との関係において、調査者と助手が明確に位置づけられているか（あるいは、最低限、調査者が日記の書き手に与える影響についてどのくらい自認しているか）
	7. 参加者のポジショナリティ 参加者の理解がどの程度十分に伝えられているか（例えば、年齢、性、社会経済状況、経験、文脈など）
	8. 調査者の再帰性 応答型日記の利用に関する調査者の再帰性はどのように表現されているか
意味の 共同構築と再・ 提示	9. ラポールと明快さ どのようにラポールと明快さが参加者とともに形成されたか一日記をつける過程の最中、または終了後、あるいはその両方に、再訪問またはインタビュー（明確化やさらなる説明あるいは再確認、またはその両方のため）が断続的に行われたか
	10. 参加者の確認 解釈／意味の確認がどのようになされたか（例えば、複数手法のトライアングレーションまたはデータ収集後の再訪を通じて）
	11. 分析の手順 日記（および補完的な手法）からのデータが、どのように解釈と、理論的または概念的な構成物に変換／要約されるかが、正当かつ明確であるか
	12. 再・提示 最終的な意味の構成物において個人が「発言権を持つ」ことができるようにするために、参加者の日記からの直接引用やその他の形式での再・提示がどれだけ効果的に用いられているか

Filep et al. (2018: 460) から筆者作成.

る。対象は自分の日記であり、研究への利用を意図して書かれたものではないため、厳密な応答型日記とは異なる。

しかし、空間や場所を関係的な構築物として捉え、その生成過程を考察するためにマイクロ地理学のアプローチを明示的に用いている。さらに、精神分析的な治療を受けるという経験が関係的であり、個人的かつ詳細な記録が分析に資することを踏まえて、日記を用いる意義を綿密に主張するなど、概念的な枠組みや方法論的な論拠が明確である点で優れている。

また、日記を直接引用しながら、精神分析が行われる空間について「物理的空間」「感情的空間」「関係的空間」「想像上の空間」「規律的空間」「夢の中の空間」という6つの形態に分類してそれぞれの枠組みや内容と、相互の重なり合いを描出しており、

分析の手順や解釈の過程が明確である。

しかし、このような一貫性は、自分の日記を参照しており、調査者と参加者が同一であるという特殊な条件下であるために達成できた可能性が高い。

Qviström et al. (2020) は、スウェーデンにおいて、余暇的なランニングを習慣としている人々に日記を書いてもらうことで、ランニングの実践や空間について時間地理学とアフォードランスの理論を用いたアプローチから研究している。インフォーマントの選定や日記の記入事項、インタビューとの組み合わせによる事実確認など、概念的な枠組みから調査設計に至る流れは明確に示されているが、分析に際しては書き起こしとコーディングを行ったと述べられるのみで、具体的にどのようなコードを付して解釈に結びつけたのかは明確に示されていない。

分析に際して、家族との関係、日常的な空間と非日常的な空間でのランニング体験の差異、観光行動との関係という3つの主題に基づいてインタビューでの発言や日記の直接引用は多数行われる。しかし、それぞれの文脈や調査者自身の再帰性が不明瞭で、研究課題との結びつきが導出される過程があいまいである。

コーディングの過程を全て記載することは学術雑誌の紙幅による制約から難しいにせよ、理論的アプローチとの整合性や調査結果の貢献を主張するためにはより詳細な記述が必要であろう。

Linn (2021) は、シリア内戦から逃れた難民の女性に日記を書いてもらい、私的・公的空間での日常生活の経験を詳細に描出するとともに、帰属意識やアイデンティティについての知見をまとめた。過去の難民についての研究において等閑視されてきた女性に焦点を当てているという点でエンパワメントの特質も有しているとしてフェミニスト地理学の一部と位置づけているが、理論的なアプローチや概念的な枠組みに関する主張は十分ではない。一方、参加者の選定や調査者のポジショナリティについては自覚的であり、識字能力の問題や女性たちの日記をつけることに対する嫌悪感などが原因で潜在的に排除された人々もいることを明記している。

分析に際しては、参加者が日記に記した具体的な経験を引用することで、ホスト社会における孤立感などの感情的な反応を明らかにしている。調査者による解釈の介入は限定的で、記述から一般的な理論に資する考察を展開するというよりも、現状を緻密に描写することで、参加者の地位を尊重し、潜在的な問題を喚起することを重視している。

Coen (2021) は、トレーニングジムでの身体活動に注目して、ジェンダー化と場所との関係について研究した過程において、研究活動自体が参加者のジェンダー認識に影響を及ぼす触媒的な機能を論じている。したがって、調査者と参加者それぞれの主

観性や再帰性に対しては極めて自覚的である一方、日記から得られたデータの分析手順や、研究全体を貫く理論的なアプローチについては明確に示されていない。

以上のように、近年では日記という調査手法自体が参加者に与える影響についての考察が進み、ポジショナリティへの意識が向上している。一方で、データの分析や解釈については依然として「コード化」といった抽象的な説明にとどまっている研究が多いことが明らかになった。

本研究ではエンパワメントやポジショナリティへの働きかけは主な目的ではなく、日常的な行動を追跡し、事物や現象と参加者との相互作用を記録するための手法として日記を用いるが、調査とその結果の公表が及ぼしうる正負両面の効果は自覚しなければならない。

次章では、本章で検討した日記調査の特質を前提に、どのように調査を設計して実施したのかについて、詳細な主体間関係や手続き、参加者との相互作用を述べながら解説する。

III 調査の経緯と実施状況

1. 調査の計画から実施

移動生活を研究するにあたり、当初はインターネットを通じて自身の移動生活経験を発信している個人に直接連絡を取ってインタビューを行う形で調査していたが、一貫した形で対象者を捕捉するために、2020年8月以降、不動産情報サービス企業である株式会社LIFULLが運営する月額定額住み放題サービス「LivingAnywhere Commons」(以下、LAC)に協力を依頼し、利用者を対象に調査を進めてきた。

このサービスは、2019年8月から提供が開始され、2022年11月時点で全国に48か所の拠点が存在する(図1)。月額27,500円(税込)を支払うことですべての拠点を予約して滞在できるほか、6,600円(税込)で1泊ずつの利用もできる⁵⁾。

2021 年 10 月から 11 月の期間には、筆者自身も同サービスを利用して 2 カ月で 5 拠点を移動する生活を実践し、拠点の管理者や、運営企業の社員等との関係を構築した。この際、滞在者へのインタビューなども散発的に実施したものの、体系立てた調査の必要性を感じ、日記調査の可能性を模索しはじめた。同サービスでは、利用者と運営者双方が参

加するオンラインコミュニティが形成され、様々なアイデアを持ち寄って発表する機会が設けられているため、2022 年 1 月の会議にて日記調査の構想を発表した。

この発表が契機となり、2022 年 2 月に同社社員と懇談し、研究関心と検討中の調査手法について伝えたところ、全面的な協力を社内で検討する旨の回答が得られた。その後、協議を経て、クラウドソーシングサービスを運営する株式会社ランサーズが開催している「新しい働き方 Lab 研究員制度」（以下、研究員制度）における LAC との共同企画として、日記調査への協力を含む半年間の活動に対して参加者を募集する方針で一致した。

研究員制度は、現行の働き方からの変化や向上を図る目的で希望者が参加する企画であり、実験と称して半年間、何らかの成果を目指して活動するものである。実験の種類は参加者が自由に課題を設定できる「自主企画」と、LIFULL 社含め PC メーカーや IT 企業、地方自治体などがそれぞれ協賛して設定した課題に取り組む「共同企画」の 2 種からなる。

本調査は後者の「共同企画」のうち LIFULL 社が参画する企画の一部に含まれ、参加者に対しては「場所に縛られない "LivingAnywhere" な生活は、人にどんな変化をもたらすか？」という課題が提示された。参加者は、「実験」として移動生活を試み、自らの生活や考え方に生じる変化を体験することを目指し、自省を補助する記録手段として日記をつけ、本調査の資料として提供する。LIFULL 社は、参加者による SNS での情報発信と研究成果発表を通じて LAC の知名度向上を図るとともに、日記を介してサービス向上に資する情報を得られる、という関係にある（図 2）。LIFULL 社からはその対価として、最大 60 泊分、オリジナル拠点が無料で宿泊できる権利、パートナー拠点についても割引率の高い特別回数券を購入できる権利、という 2 つのインセンティブを提供された。

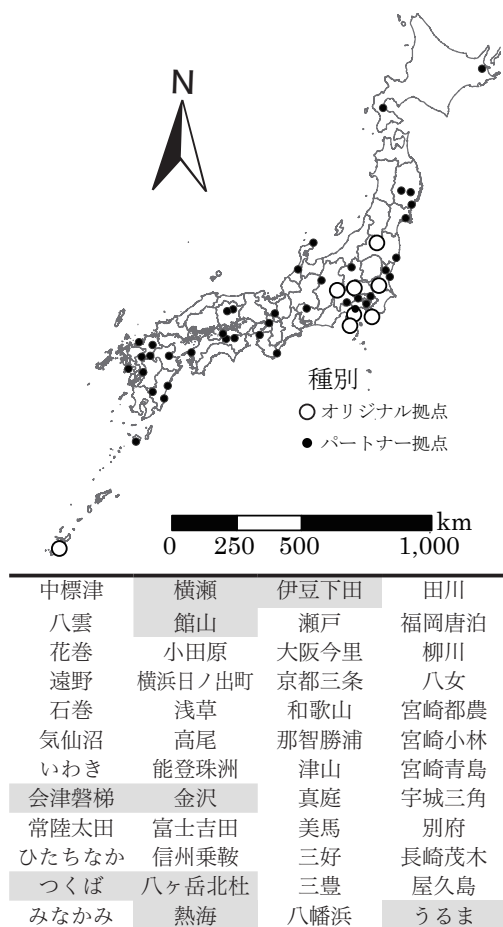


図 1 LivingAnywhere Commons の拠点分布

「オリジナル拠点」とは、運営主体である株式会社 LIFULL が遊休資産をリノベーションし、自ら運営する拠点である（表中網掛け）。「パートナー拠点」とは、既存のゲストハウスやホステルなどと提携し、LAC を介した予約や宿泊を可能とした施設である。
企業ホームページ (<https://livinganywherecommons.com/base/>, 2022 年 11 月 6 日最終閲覧) から筆者作成。

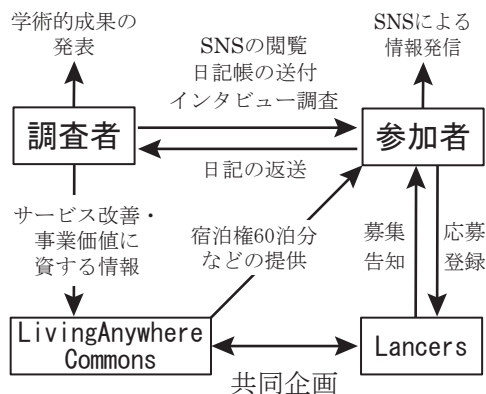


図2 調査に関係する主体の相関図

参加者はSNS上での情報発信時に「#Livinganywherestory」のタグをつけて投稿することが規定されているため、調査者は各媒体の検索機能などを利用して同タグのついた投稿を閲覧・リアクションを行うとともに、情報源として利用する。

参加者の募集に際し応募要件として提示したのは、①2022年6月～12月の期間中、のべ1カ月以上LACを使った生活ができる、②2022年6月～12月の6カ月間、日記をつけることができる、③活動の様子をSNSで発信できる（#LivingAnywhereStoryのタグ付けを行う）、という3点である。このほか、研究員制度全体の応募条件（18歳以上、Lancersへの登録、中間・最終レポートの提出など）も満たした応募者約60名の中から、LIFULLの担当者が中心に面接と書類選考を行って20名を選考した。選考の過程に筆者は携わっておらず、研究に影響を及ぼす恣意的なサンプリングは行っていない。しかし、企業担当者が応募者の就業状態や企画に対する意欲などを考慮し、移動生活の実現可能性が高い人を選定したことには注意が必要である。

以上の経緯を経て、2022年6月から調査を開始した。参加者には毎月1冊で完結するA5判サイズの日記帳を送付し、同封した返送用の封筒で記入済みの日記帳を返送してもらうという手順を設定した。これは、移動生活の途上で大きな日記帳を持ち運ぶ

ことに抵抗があるという参加者からの意見を反映させるとともに、参加者の離脱や日記帳の紛失によるデータの喪失を最小限にとどめたいという意図に基づく判断である。デジタル形式での記録も検討したが、記入内容の自由度を高めるとともに、郵送による返送の手順を毎月組み込むことで継続的に参加者との接点を作るため、紙媒体での記録を選択した。

同時に、個人情報の取り扱いについての指針を策定し、2022年6月に行われた東京大学大学院総合文化研究科「ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」からの承認を得た。この指針では個人情報の秘匿や研究からのオプトアウト、そして情報公開前の事前確認などを定めており、参加者にも告知することによって、情報の取り扱いについて同意を得ている。

日記帳は、図3に示したように、「日付等記録欄」「ライフログ」「感じたこと・考えたこと」「フリースペース」の4セクションからなる。本調査の目的が場所感覚の探究であることは参加者に対して周知しているが、人文地理学における場所という語の含意について参加者に十分な理解を得て記録を求めることは難しいと考え、比較的自由度の高い記入項目を設定した。「感じたこと・考えたこと」のセクションには罫線を設けた一方で、フリースペースには設けないことで、文字情報以外の記録（写真やイラストなど）も残せるようにし、多面的な情報の収集を目指した。

さらに、企画が開始されて1カ月経過した7月から8月にかけて、参加者個人に対して1時間程度のインタビュー調査を行い、参加に至るまでの居住歴や参加の動機、今後に向けた期待等の聞き取りを行った。この時、筆者の自己紹介や、研究関心と内容についての質疑応答も行い、日記という個人情報が高者に読まれることに対する心理的障壁を緩和するように努めた。

その後も毎月1度参加者が集う懇談会をオンラ

[illegible]

図3 参加者に配布した日記帳のデザイン

イン上で行い、近況報告や情報交換、日記の記入状況についての報告や問題の収集を行い、参加者の利便性が高くなるように送付の方法を改善したり、返送が遅れている人への働きかけを行ったりした。

以上、本節では日記調査の実施に至るまでの経緯と計画の推移について詳述した。本調査の事例では、参加者に負担を強いる日記の記入という手法に対して、企業の協力を得ることで、宿泊施設の利用権という対価を提供して対応した。この対応については、研究の主題である移動生活を促進する一方で、特定の選択に誘導しようという点で、調査結果に与える影響や理論的な一般化に対して疑義が呈される可能性もある。しかし、日記調査は負担が大きいためこそ、研究協力者を募るためには、このように複数主体を巻き込んだ手段を取らざるを得ない状況もあると考えられる。その際は、調査結果の分析や提示の

段階でこれらの文脈的な影響について常に自覚的になり、配慮を重ねた上で解釈や考察することが不可欠である。

Ⅱでもまとめた通り、日記を書き、読まれるという事実が参加者に与える心理的な負担は大きい。対価の提供によって安易に解決したと考えるのではなく、研究者自身がその負担を常に自覚し、参加者との間で十分な信頼関係を築くための誠意ある対応を継続し、向上を図り続けることが重要であると考えられる。

次節では、実際の調査状況を報告し、これらの課題が顕在化する様相を述べる。

2. 実際の調査状況

表7は、研究参加者の属性をまとめた一覧表である。

表7 研究参加者の基本属性一覧

ID	年代	性	就業	職種	出身
01	20	女	ア	医療福祉／宿泊業	東京
02	30	男	会・個	コミュニティマネジメント ・コンサルティング	大阪
03	30	女	ア	飲食業／宿泊業	北海道
04	20	女	個	ライター	茨城
05	30	女	会	エンジニア	北海道
06	40	女	個	デザイナー・コンサルティング	長崎
07	20	男	個	コーチング	大阪
08	30	女	個	ライター／SNS運用	北海道
09	20	男	個	ライター	神奈川
10	20	女	会・個	事務・コミュニティマネジメント	新潟
11	20	女	個	動画作成	東京
12	50	男	個	不動産業（運営・投資・ライター）	兵庫
13	30	男	個	ライター	東京
14	30	女	個	デザイナー・イラストレーター	神奈川
15	50	女	個	ライター	兵庫
16	?	男		インタビュー未実施、詳細不明	
17	?	女		インタビュー未実施、詳細不明	
18	?	男		インタビュー未実施、詳細不明	
19	?	男		インタビュー未実施、詳細不明	
20	?	女		インタビュー未実施、詳細不明	

ID15以降の6名は日記の返送が無いが、ID15に対してはインタビュー調査が実施できたため属性を記載している。ID16以降の5名は、企業担当者による選考面接で得られた情報は存在するが、筆者による直接の確認が取れていないため、詳細不明としている。出身は本人の申告によるものとし、都道府県単位で示した。就業の形態はそれぞれア：アルバイト、会：会社員、個：個人事業主、経：経営者、である。

選考を経て企画に参加したのは20名であったが、ID20は初回の日記帳送付時から連絡先不明となり、複数回異なる手段での連絡を試みたが返答がなかった。ID19は2回目まで記入用の日記帳を送付したものの、いずれも返送がなく、3回目以降は送付先が不明となった。ID18は初回の記入済み日記帳まで返送があったものの、家庭の事情により研究への参加を続行することが難しい旨の連絡があり、2回目以降は可能な範囲での記入を依頼したが返送がなくなったため、3回目以降は日記帳の送付自体を取りやめた。ID17は10月時点まで毎月日記帳を送付しているものの、一度も返送がなく、状況を問い合わせても「落ち着いたら返送する」という回答を得るにとどまっている。ID15・16も同様に、複数回「返送が遅れる」旨の連絡が届いているものの、2022年10月末時点までに1度も返送されていない。

以上のように、まず参加者の中から3名が離脱、1名が不明、2名が遅延している状態である。大規模なアンケート調査や活動日誌調査と異なり、母数が少ない調査であるため、サンプル数を可能な限り維持するための対策を講じる必要がある。今回の調査では、毎月の送付時に添え状を付し、前月分の日記で特に研究に資する部分について取り上げて所感とお礼を伝えるようにしたほか、返送が遅滞した際にはメールやSNS、Slack（LACのオンラインコミュニティが利用するコミュニケーションツール）で連絡を密に取るなどの対応を取ったものの、離脱を防ぐことは困難であった。

図4は、10月返送分までの日記帳を書き起こし、最も持続的に記入されていた「感じたこと・考えたこと」欄の文字数や返送者数の推移を示したグラフである。一部、「フリースペース」の欄にまで超過して記載された文章も存在したため、内容的なつな

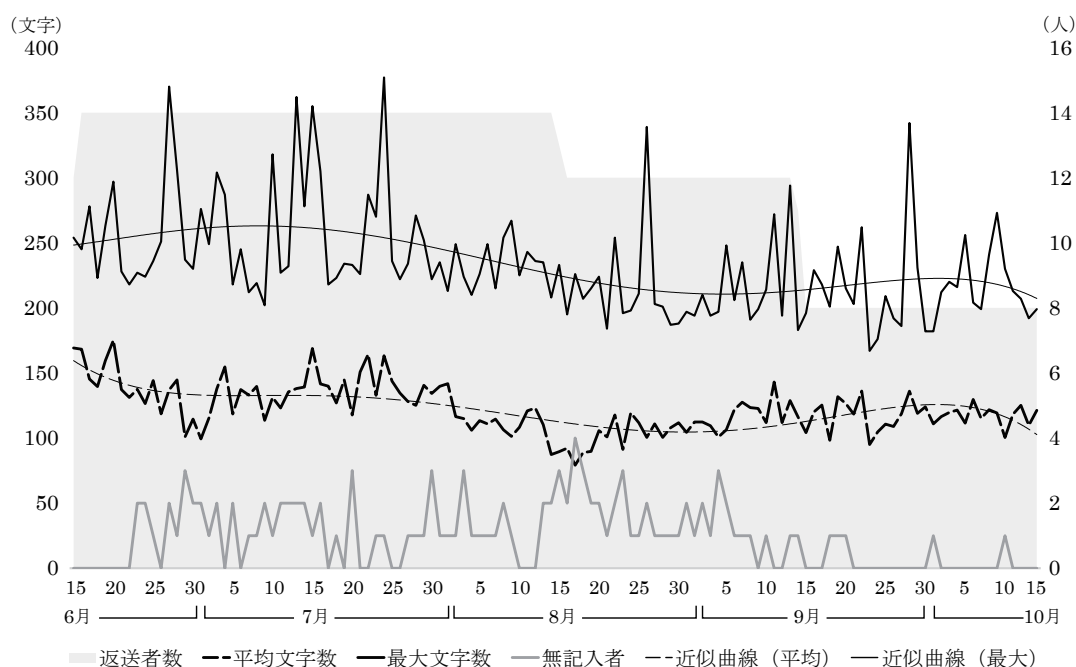


図4 10月返送分までの日記記入状況（「感じたこと・考えたこと」部分）

がりがある場合には書かれた位置によって区切るのではなく一体として文字数に含めている。そのため、最大文字数が 350 以上となる日も存在している。

まず、全体の返送者数が徐々に減っていることが確認できる。返送用の封筒送付から実際に返送されるまでの期間が月を追うごとに増加しており、8～9 月分の日記が返送されていない参加者も 2 名いる。今回の調査では企業の協力を得てインセンティブを提供しているため、序盤は効果的に参加意欲を高めることが可能であったものの、期間を追うにつれて日記の負担感の方が上回っていった可能性が高い。

平均文字数は 100 から 150 の間を推移しているが、期間全体を通して近似曲線を見ると、漸減傾向にある。6 カ月と調査期間が長いことが影響し、後半になるにつれて意欲が低下した可能性がある。期間が進んでも迅速に返送を続けている参加者は調査に協力的だと考えられるが、そのような参加者の記録が中心となる 9 月や 10 月の記入状況でさえ振るわない状況にある。実際、「この日も家で仕事…特に書く事はありません…」(ID13, 10 月 3 日) など、日常的な生活を過ごした日について徐々に記録する意義が失われていくと感じている例が存在した。また、調査開始当初、移動生活を通じて得たさまざまな経験についての記述が日記の大半を占めると想定されたが、実際には仕事など日常生活に関する記述が大部分を占めるなど、研究全体の見通しに影響を及ぼしうような事象も発生している。

II の 2 の 1) でまとめたように、これらの限定的な記述や短い記述について、内容が希薄なものとして捨象するのではなく、他の情報源から得た補足情報を加えたり、より広く全体の文脈の中に位置づけたりすることによって深い考察に結びつけることが質的調査の利点であり、必要な手続きである。本研究では SNS での投稿を収集したり、日記調査期間前後にインタビュー調査を行ったりすることで対応する。

以上、本節では進行中の調査でどのような人が参

加者として集まったのかについて示し、日記の文字数という単純な指標を示すことで、どの程度データが継続的に得られているのかを示した。また、調査の過程で参加者に対してどのような働きかけを行ったのかをまとめ、今後の分析に当たって生じうる課題と、考えられる対応の内容について検討した。

次章では、収集した日記の内容を一部分析しながら、日記調査独自の利点と課題について検討する。

IV 日記の利点と分析上の課題

本章では、実際に収集した日記の記述を踏まえて、移動生活者の場所感覚を探究するための試行的な分析を行う。前章までに述べたように、日記調査では分析や解釈の段階で明確な手法が定められておらず、あいまいな表現に終始している場合が多い。そこで、本稿では大谷 (2019) を参考に「SCAT (Steps for Coding And Theorization)」を用いて、適用可能性を探る。

SCAT では、データに対して①データ内の注目すべき語句、②それを言い換えるためのテキスト外の語句、③それを説明するようなテキスト外の概念、④そこから浮かび上がるテーマ・構成概念、という 4 段階でコードを考えて付与した後、テーマや構成概念からストーリー・ラインを記述し、ストーリー・ラインに基づいて理論を記述する。一連の過程が一覧表の形式で行われるため、明示的かつ定式的であるとされる (大谷 2019: 271)。

ただし、全参加者の記述を横断的に扱って移動生活者の場所感覚全体を考察することは、本稿の射程を超える。したがって本章では、回収された日記の中で「うるま」という場所に対して様々な感情を記述していた参加者 ID08 の日記の分析に SCAT を試用する。表 8 は、大谷 (2019) で提示されている SCAT のテンプレートに当てはまるように、ID08 が LAC うるま拠点に初めて訪問した期間中の日記を分析したものである。

表 8 ID08 の日記に対する SCAT での分析例

番号	記入欄	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念	(5) 疑問・課題
1	6/21 感・考	今日は移動日。日ノ出がイマイチすすぎてうるまに 移れるのは嬉しいが open 前のうるまクオアリティ めっちゃくやん配だった。(汚くないか? 仕事で うるまか? だんな人いるか?) ただヒコキーで空こ るについたとききの海の青さで気持ちも晴ればれ 洗たくできまっせ!!! キッチンめっちゃきたない です!!! Wifi おそ!!! どうなる!!! うるま暮ら し!!! Ww	日ノ出がイマイチ/移れるのは嬉しい/クオアリティ/心配/汚い/仕事できるか/晴ればれ/うるま暮らし	前拠点への不満/移動の期待と不安/設備に対する評価/職場としての機能/自然環境からの働きかけ/生活の場としての評価	建造環境に与えられた呼称としての地名/滞在地の選好/職住一体化/視覚情報に基づく認識と心情変化	建物や拠点を代表する地名/仕事も生活もする場所に求める条件/不安と期待を抱えた移動/視覚情報に依存した高揚感	・「イマイチ」と評価される要素は何だったのか? ・不安は解消されたようにも見えるが本当に解消されたのか?
2	6/21 フリー	沖繩ってめっちゃいいところなんだけど移住したいとは思わないのよね。 島全体が観光で感じて暮らしがイメージできなくて。	沖繩/移住したいとは思わない/島/観光で感じ/暮らし	限定的な視点からの沖繩/観光と暮らしの弁別	観光者のまなざし/スキュールの跳躍/居住地選択の選好からの逸脱	生活と観光の二元論/居住地に通さない土地/島全体への限定的な印象	・以前にも訪問した経験などが影響しているのだろうか?
3	6/22 感・考	今日はコンボスト大学生 G 君と M の環境こうざ&コンボスト作り。若い 2 人の活動は熱があるしステキ。でもみせ方、伝え方もすごい大事。いいこととやってくるのにもつたいたいって感じがした。	活動/熱/ステキ/もつたいたい	拠点限定のイベント/関係者の活力/不完全燃焼	社会活動の場/人的交流の促進/心理的距離の隔絶	偶発的な社会活動への参加機会/好感と不満感	・このような活動への参加は一般的なのだろうか?
4	6/22 フリー	コンボストづくりくちよいよきさっぽつった。拠点のチャリ、こわれているのかつかえない。せつかのんでんどうチャリ...しよぼん...	さっぽつった/チャリ/こわれている/しよぼん	イベントへの意欲低下/移動手段の喪失/落胆	意図しない社会活動への参加意欲低下/移動の不便/身体的移動への期待と落胆	身体的移動の不便さがある/落ちた	・自転車の故障は実生活への影響がどのくらいあったのだろうか?
5	6/23 感・考	今日は 6/23 沖縄戦争いれいの日。アメリカ兵が島と親こうがあり、こつそりと参拝にきていた。不思議な感じ。たつた数十年前、ここで多くの人が死に自らの命をたつた。そんな人たちがつないでくれた命に、私たちは今なにを言うのだから。	沖縄戦争/不思議な感じ/つないでくれた命	史実との遭遇/言明の難しい感情/生命の繋がりに対する意識	史実の現前/情緒的な話さぶり/時間性への意識	史実と向き合うことによる情緒的な揺さぶり/歴史性に対する思いやり	・不思議な感じとは詳細にはどのような気持ちだったのだろうか?
6	6/23 フリー	沖なわで育った子に「僕らはオキナワ戦争についてのもので教育をうける。他の地方の人は?」ときかれた。うけない。でも土地土地の悲しみやトラウマに対する教育はうける。その場所場所によって引き継いでいくのは。家ほしい。	沖なわ/土地土地/教育/場所場所の色はある/引き継いでいく/家ほしい	土地の個性の強調/他者の語りによる気づき/場所を構成する外力/一貫性の保持/定住者への仮託/定住への願望	他所の他者との交流/場所アイデンティティの再確認/定住と根拠地の重要性	場所の固有性/場所を代表する他者との交流/場所アイデンティティの永続性と維持への要請/根拠地形成の希求	・引き継いでいかなくてはならないと思つたのはなぜか? ・家がないと引き継がないのだろうか?
7	6/24 感・考	今日は楽しみだった R コンサル♡相変わらずのリーディング能力で、K 君がめっちゃやぎやきたいされてたのも名前だけで見抜いてた。すげー。 んで、K のことだが...うーんそれもいいか。 R 先生のリーディングでは「あなたは医療・介護・母子えいせいなどの分野でホームをつくる人」らしい ふむふむ。(せと内海、いばらき、一	リーディング/ホームをつくる人/せと内海/いばらき	他者からの性格診断/適性の助言に対する納得/場づくり/候補地	他者による未来設計の指針提示/居場所	人生に対する迷い/助言を求める不安定性/居場所の形成に対する意識	・占いのようなものだろうか? ・なぜこのようなサービスを受けようと思つたのだろうか?

8	6/25 感・考	コザで一晩 LAC のみんなとのみ。朝までのむんがいていぶつだらう？とってもたのしかった！！が夜はやっぱり 0 時まで。0 時をこえたと苦行になるのでこれから 0 時シンデレラ説は不変。 女子ドミトリは静かでいい。いびきもないし。配りよりもあって目を覚ました時、しゅん家かと思うしゅんかんがある	コザ／LAC のみんな／ たのしかった／女子ドミ トリ／いびき／配りよ ／家かと思う	地名の具体化／サービ ス を通じて内輪感の形成／ 人間関係の構築と共同体 意識の変化／共同体意識 の高まり／休息できる私 人的空間の確立／安全と安 心を確保できるホーム	・コザはどのような場所 として意識されたのだろ うか？ ・具体的な「配慮」とは どのような内容だろう か？
9	6/25 フリー	うるまのドミトリのいいところ ・ベツでしゃっすアブリングきいてる ・おふとんがペラペラじゃやない ・カパーがよくある白い布じゃやない ・しゃ光カーテン ・空調いい感じ ・天井がぬけてる	いいところ／スプリング きいてる／ペラペラじゃ ない／しゃ光カーテン／ 天井がぬけてる	ホーム意識をもたらし要 素の具体化／身体的刺激 の緩和／開放性と閉鎖性 の両立／美的感覚の一致	・なぜ天井がぬけている ことを良いと表現したの だろうか？
10	6/26 感・考	今日うるま拠点	うるま拠点	スケールの再縮小	・途中で書くのを辞めた 記述をどこまで活用して よいだろうか
番号	記入欄	テキスト	(1) テキスト中の注目す べき語句	(2) テキスト中の語句の 言い換え	(3) 左を説明するような テキスト外の概念
					(4) テーマ・構成概念
					(5) 疑問・課題

ストリー ライン	ID08 の日記における「うるま」や「日ノ出」は当初、[建物や拠点を代表する地名] であった。拠点の移動に際しては、[仕事も生活もする場所に求める条件] が多岐にわたることから様々な懸念事項が残っており、うるまに対して「不安と期待を抱えた移動」となった。しかし、海の青さという「視覚情報に依存した高揚感」によってこの不安を克服する、一方、[鳥全体への限定的な印象] から、[生活と観光の二元論] の理解に基づき「居住地に適さない土地」であると判断して、拠点への到着後、[偶発的な社会活動への参加機会] を得ると、「好感と不満感」の両方を抱く。また、「身体的移動の不便さがもたらす落胆」にも見舞われる。その後、沖繩戦という「史実と向き合うことによる情緒的な揺さぶり」を受けて、[歴史性に対する思いやり] を持つことに加え、[場所を代表する他者との交流] を経て、[場所の固有性] を感じるようになり、[場所アイデンティティの永続性と維持への要請] を主張する。これに伴って、自らの「航跡地形成の希求」も表明される。その背景には、他者に「助言を求める不安定性」に表出しているところ、[人生に対する迷い] があり、[居場所の形成に対する意識] を強く有している。潜在が長期化する、[行動の広がりに伴う地名認識の変化] が生じると同時に、滞在者などに対する「共同体意識の高まり」も看取される。拠点に対しては「休息の場としての建造環境」を評価するようになり、[開放性と閉鎖性の両立] や、[美的感覚の合致] によって、[休息できる私的空間の確立] が達成され、[安全と安心を確保できるホーム] として認識するとともにその「ホーム意識の増幅」も継続している。この時、うるまという地名は引きづき「建造環境に与えられた呼称としての地名」という役割も有している。
理論記述	・日記の中で地名は「建物や拠点を代表する地名」として用いられることが多い。・移動生活者は職住一体となった生活を送るため、[仕事も生活もする場所に求める条件] として通常の観光客などとは異なる多様な要素を気に掛ける。・気に入った拠点に移れば良い一方で、[不安と期待を抱えた移動] を繰り返すことになる。・生活者の要素も持つ一方で「生活と観光の二元論」は維持しており「視覚情報に依存した高揚感」など観光者のまなざしに近い反応を示すこともある。・土地の「史実と向き合うことによる情緒的な揺さぶり」の影響力は大きく、[場所の固有性] や「場所アイデンティティの永続性と維持への要請」を意識するようになり、[人生に対する迷い] が移動に表出しており自らの「航跡地形成の希求」や「居場所の形成に対する意識」に結びついている。・滞在拠点に対しては特に「休息の場としての建造環境」を重視しており、[安全と安心を確保できるホーム] として認識でき、より長期的文脈を見て滞在拠点に求める条件や評価基準を考える必要があるのではないが、・日記の書き手が用いる地名や施設に関する表現を無批判に分析や解釈の前提となる枠組みとして理解することは、場所感覚の探求という根源的な研究の目的に照らし合わせた時に却って視野を狭めるのではないが、具体的には、閉曲線で区切られたような場所概念を前提としてしまふ恐れがあるのではないが、・沖繩に對する印象が今回の訪問だけで形成されたとは考えにくく、メディアなどから得る情報や過去の行動から受けた影響も模索する必要がある。・家かと思うという表現だけを根拠にホーム概念と結びつけて論じているのではないが、・移動生活を自ら希望している一方で家が欲しいと述べたような追加調査や理論的なアプローチが必要か。
さらに追求すべき点・課題	ID08 の日記から筆者作成、個人名を頭文字で表記するなど改めた以外は、原文の表現を可能な限り維持した。ただし、入力できない絵文字とイラストは省略や近い文字で代替している。大谷 (2019) によれば、「ストーリー・ライン」は、「(4) に書いたコード (テーマ、構成概念) をすべて使って、一筆書きで書くようにして書く」(同: 308-309) もので、[内が (4) のコードに該当する。一方「理論記述」は、「ストーリー・ライン」からどのような知見が得られるかを考え、その知見を一般性、統一性、予測性などを有する記述形式で表記したもの」(同: 324) であると考えられる。これらを参考にそれぞれを作成した。

結果、収集した日記のごく一部に対してであっても、SCATを利用することで、①地名の役割、②場所の固有性に対する認識、③ホーム意識という、それぞれ地理学で多くの研究蓄積がある論点を見出すことが出来た。

まず、地名の役割について、ID08は当初「うるま」を拠点や建物に対する呼称として用いていた。そして、「沖縄」という地域に対して、観光客に近いまなざしを送り、観光地のイメージだけが先行し、居住地としての選択肢から外れるという印象を抱いていた。しかし、滞在を続ける中で、沖縄の中でも細分化された地名を意識的に用いるようになったり、特に沖縄戦という史実に直面した際の情緒的な揺さぶりを強く感じたことにより、観光地としての印象以外にも歴史や生活が営まれる場として沖縄という地名を理解するようになったりする変化が生じた。

次に、場所の固有性に対する認識も大きく変化した。ID08は家を持たずに移動生活を送っており、うるまの前の滞在地である横浜日ノ出町拠点から移動してきた。移動の当初は、仕事の場であり生活の場でもある拠点の設備面に対して不安と期待の双方を抱えており、関心の対象は閉じた空間に対してのものであった。しかし、他の滞在者、そして地域住民との交流によって、より広域的な地域に付与される歴史性を認識し、その固有性を重視して場所アイデンティティの永続性と維持への要請を表明するまでに変化した。その背景では、自身の人生に対する迷いや、居場所の形成に対する意識が影響していると考えられ、家を持ちたい、定住したいという根拠地形成の希求に結びついている。

これに伴って、ホームに対する意識も顕在化する。日記で複数回言及される「家」は、上述のような背景を踏まえると、物理的な家屋という意味だけではなく、精神的な拠り所としての「ホーム」の意識が強く含まれていると考えられる。休息の場としての建造環境であるドミトリの設備面で、自らの

身体的刺激を和らげられる物品がそろっていたり、美的感覚の合致するデザインが取り入れられていたりするという物質的な要素だけでなく、「LACのみんな」という共同体意識や、「配りよもあって」のように、他の滞在者との距離感や関係性に対しても安全と安心を感じることによって、ホーム意識が高まっていると考えられる。

SCATでは、一部の記述だけを直接引用するのではなく、全データと調査者の分析過程を一覧表として提示するため、飛躍や破綻が生じていないかどうか確認したり、他の解釈や概念の適用可能性を議論したりするのが容易である。これは過去の日記調査で課題とされたコード化の不明瞭さを乗り越える方策となりうる。

また、今回はSCATを通じて「沖縄」に対する認識が変化していることを見出したが、テキストマイニングなどの量的手法では同じ単語として扱われる上、幅広い文脈の中での位置づけを考察することが難しい。個別の記述に対する抽象化を都度行いながら、長期にわたる文脈の中で通時的に解釈する質的手法によって明らかにできる特有の事項があると改めて確認できた。

なお、大谷(2019: 306)が指摘するように、「テキストを既存の概念にだけ当てはめて解釈するなら、それは過去の研究の追認にはなっても、創造的な質的研究にはならない」ことには自覚的でなければならない。今回重要視した「場所」「地名」「ホーム」などの概念を絶対化せず、研究を進めていく必要があるだろう。

その他、手法としての課題も明らかになった。表8で扱えたのは5日分の日記にとどまっており、20名による6カ月分の日記を対象としたSCATの過程を全て提示することは現実的ではない。また、元来SCATの分析対象として想定されているインタビュー調査の文字起こしなどと異なり、日記は長期間にわたるとともに、語られる主題が頻繁に移り

変わる。このようなテキスト群をどのように区切って SCAT を適用すべきかは不明確である。さらに、日記帳のスペースは限定的であるし、本調査の性質上、協力企業の視線を意識した言及になっているなど、多くの制約が加わっていることも分析の前提として考慮しなければならない。

今後、SCATの利点を生かしつつ、より日記の分析に適した形になるように、分析手法を改善していく余地は大きい。また、日記に表出したテキストに依存せず、疑問点があればインタビュー調査で補足したり、他の媒体での記述を参考にしたりすることで情報源を多角化することも有効であると考えられる。

V おわりに

本稿では、国内・海外における日記を用いた地理学の先行研究をレビューするとともに、教科書的な著作における解説を紹介したうえで、実際に調査を設計し実践・分析するまでの詳細な経緯を述べ、調査結果の一部を示しながら利点と課題について検討した。

日記調査は人文学や社会科学全般で利用が広まっており、デバイスの発達によってさまざまな手法の可能性が展開されている。中でも、研究者が日記の内容について一定の指示や誘導を与えて参加者に記入してもらう応答型日記 (solicited diary) は、一定期間を経時的に、かつ記憶よりも正確に事象を記録できるとか、一人の調査者が複数の対象を同時に追跡できるといった日記一般の利点に加え、調査者の関心を参加者が意識し、経験や感情を内省的に記述するという利点もある。したがって、調査自体が参加者の変容を促したり、社会的な地位に影響したりするといった側面からも注目を集めている。そのため、特に英語圏の地理学において、フェミニスト地理学や地理教育に焦点を当てた研究で利用されている。

しかし、日本の地理学においては、史料としての日記の利用が中心であり、応答型日記を用いた研

究も詳細な活動記録を集めることに主眼を置いていて、記述の質的な側面についての研究は不十分であった。

応答型日記の中でも自由記述を中心とする場合、調査者と参加者の双方に大きな負担が加わるだけでなく、記述の内容に個人差が大きく生じる。したがって、調査の実施可能性が低いだけでなく、分析や解釈が難しいという課題があった。これらが日記調査の利用が普及しない障壁となっていると考えられる。

以上のようなレビューを踏まえて、日本で近年注目を集めている移動生活について、実践する人々の場所感覚に焦点を当てて研究する場合、個人の実践や感情に迫るために自由記述を中心とする応答型日記を導入し、定性的にデータを分析することが有用であると判断した。設計の際には、手法に関する規範的な著作や、方法論的な厳密性についての批判、経験的な先行研究を参考にしたことによって、6 か月という長期にわたる調査を実現した。

実際に収集された日記の定性的データに対する分析と解釈では、過去に指摘されてきた明示的な分析手法の不在を克服するため、SCAT を試用した。一部のデータを用いた例を通じて、時系列を追って記録された個別のテキストから抽象的な概念を見出すことと、各テキスト間の関係性を意識した理論記述を相互参照的に行うことで、自由度の高い日記から地理学的な含意を多く見出すことができた。また、その過程を明示的に示せることも大きな意義として確認された。これらを両立することは、特に日本で行われてきた定量的な分析では実現できなかった点であり、本研究の新規性を示している。

一方、今後の本格的な分析に向けては、日記という情報源に固有の特徴に合わせて、さらなる改善が必要であることも明らかになった。最大の課題は、データの収集期間とテキストの長さが SCAT の対象として想定されたインタビュー記録に比して長大であるとともに一貫性が弱いため、ストーリー・ラ

インの適切な構築と適切な提示が難しいことである。分析手法の精緻化を進めるとともに、コード化をより創発的に行うための地理学内外を問わない知識の渉猟も重要である。

以上、本稿では、質的な研究における応答型日記の利用についてまとめ、可能性と課題を明らかにした。今後の日本における地理学、特に人文地理学の射程を広げ、質的な研究の選択肢と可能性を拡大していく嚆矢となることが、本稿の学術的な貢献である。

本稿の作成にあたり、LivingAnywhere Commons 事務局の皆さまには、調査への全面的な協力を頂きました。そして新しい働き方Lab 指定企画ご参加の皆さまには、日々日記をつけるという多大なるご助力をいただきました。また、東京大学人文地理学教室の先生方・院生諸氏からは、さまざまな御指導と御助言をいただきました。末筆ではありますが、本稿に関わったすべての皆様に感謝の意を申し上げます。なお、本研究はJST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108 の支援を受けています。

注

1) 通常の住まい以外にも生活拠点を有し、日常的に移動しながら生活する暮らし方に対する呼称は多岐にわたり、政策との関係では「マルチハビテーション」が全国総合開発計画で用いられたほか、都市部と地方部の往復を前提に国土交通省が推進してきた「二地域居住」も主要な概念である。一方、「アドレスホッパー」は2019年に日本で一個人が提唱したもので、拠点の所有を問わず、移動を中心に生活する様式全般を指すとされる。そのほか、学術研究では「多拠点生活」を表題に含む研究が複数存在し、主要なインターネット検索エンジンでのヒット件数も多拠点生活という語が最多である。しかし、いずれの語にも明確な定義は存在せず、生活拠点を単一に限定せず日常的に移動して生活していることのみが共通している。そこで、本研究では、移動という共通性に焦点を絞り、一貫して「移動生活」と称する。

2) 日本では管見の限り定訳が存在しないため、以降本稿では「応答型日記」と訳す。

3) これは、「歴史的事実を透明に伝えるものとしてではなく、その表象作用に対して意識的な研究を取り上げる」(成瀬ほか 2007: 572) という方針の影響により、歴史地理学で史実を描写するものとして日記を分析したり、自然地理学で当時の自然現象の復元する手がかりとして日記を分析したりする研究が言語資料の分析に含まれなかったことが影響していると考えられる。

4) このほかにも、Eidse and Turner (2014) と Filep et al. (2015) が応答型日記を利用しているが、両論文は Filep et al. (2017) の著者による研究であり、同論文内でも引用されているため除外する。

5) 2022年12月1日からは、オリジナル拠点は無制限で、パートナー拠点は月9泊までの利用が可能な Standard プラン (月額 39,600 円 (税込)) と、全拠点無制限で利用できる Premium プラン (月額 94,600 円 (税込)) に再編されることが発表された。一方、1泊単位の利用については 5,500 円に引き下げられる。

文 献

石井 茜・室崎千重・近藤民代・斎藤真奈夢・前田充紀・西田 極 2022. 多拠点生活者の地域受け入れにつながる住民の認知・出会いを促す要素と仕組み——奈良県吉野郡吉野町上市を事例として、都市計画報告集 20: 399-404.

英和出版社 2020. 『EIWA MOOK 複住スタイル Vol.2 特集 仕事を変えずに拠点を変える.』英和出版社.

大谷 尚 2019. 『質的研究の考え方——研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会.

大野哲也 2007. 商品化される「冒険」——アジアにおける日本人バックパッカーの「自分探し」の旅という経験. 社会学評論 58 : 268-285.

国土庁 1987. 『第4次全国総合開発計画』

国土交通省 2020. 平成31年度(令和元年度)テレワーク人口実態調査——調査結果の概要. (<https://www.mlit.>

- go.jp/report/press/content/001338554.pdf, 2022 年 11 月 5 日最終閲覧)
- 佐藤大祐・澁谷和樹 2015. 富士山麓における別荘地の開発と利用形態. 地学雑誌 124(6): 965-977.
- 第一プロGRESS 2020. 『TURNS 41 号 多拠点居住と新しい働き方』第一プロGRESS.
- 滝波章弘 2005. 『遠い風景——ツーリズムの視線』京都大学学術出版会.
- 成瀬 厚・杉山和明・香川雄一 2007. 日本の地理学における言語資料分析の現状と課題——地理空間における言葉の発散と収束. 地理学評論 80: 567-590.
- 前田充紀・近藤民代・室崎千重・西田 極・石井 茜・斎藤真奈夢 2022. 多拠点生活者の居住動態パターンとライフスタイル志向の関係に関する研究——定額住み放題サービス利用者を対象として. 都市計画報告集 20: 415-422.
- よしかわけいすけ 2019. 『高校教師, 住まいを捨てる.』河出書房新社.
- Anderson, J. and Erskine, K. 2014. Tropophilia: A study of people, place and lifestyle travel. *Mobilities* 9: 130-145.
- Baxter, J. and Eyles, J. 1997. Evaluating qualitative research in social geography: Establishing 'rigour' in interview analysis. *Transactions of the Institute of British Geographers* 22: 505-525.
- Benson, M. and O'Reilly K. 2009. Migration and the search for a better way of life: A critical exploration of lifestyle migration. *The Sociological Review* 57: 608-625.
- Bijoux, D. and Myers, J. 2006. Interviews, solicited diaries and photography: 'New' ways of accessing everyday experiences of place. *Graduate Journal of Asia-Pacific Studies* 4: 44-64.
- Clifford, N., Cope, M., Gillespie, T., Gillespie, T. and French, S. eds. 2016. *Key methods in geography (3rd edition)*. London: Sage.
- Coen, S. E. 2021. "Ok, gender! Where are you?!": On the potential of catalytic validity in feminist geographies of everyday inequities. *Area* 53: 699-707.
- Duffy, M. and Waitt, G. 2011. Sound diaries: a method for listening to place. *Aether: The Journal of Media Geography* 7: 119-136.
- Dummer, T., Cook, I., Parker, S., Barrett., G. A. and Hull, A. P. 2008. Promoting and assessing 'Deep Learning' in geography fieldwork: An evaluation of reflective field diaries. *Journal of Geography in Higher Education* 32: 459-479.
- Eidse, N. and Turner, S. 2014. Doing resistance their own way: Counter-narratives of street vending in Hanoi, Vietnam through solicited journaling. *Area* 46: 242-248.
- Evans, J. and Jones, P. 2011. The walking interview: Methodology, mobility and place. *Applied Geography* 31: 849-858.
- Filep, C. V., Thompson-Fawcett, M., Fitzsimons, S. and Turner, S. 2015. Reaching revelatory places: The role of solicited diaries in extending research on emotional geographies into the unfamiliar. *Area* 47: 459-465.
- Filep, C. V., Turner, S., Eidse, N., Thompson-Fawcett, M. and Fitzsimons, S. 2018. Advancing rigour in solicited diary research. *Qualitative Research* 18: 451-470.
- Heller, E., Christensen, J., Long, L., Mackenzie, C. A., Osano, P. M., Ricker, B., Kagan, E. and Turner, S. 2011. Dear diary: Early career geographers collectively reflect on their qualitative field research experiences. *Journal of Geography in Higher Education*. 35: 67-83.
- Holloway, J. 2003. Make-believe: Spiritual practice, embodiment, and sacred space. *Environment and Planning A* 35: 1961-1974.
- Kitchin, R. and Thrift, N. eds. 2009. *International encyclopedia of human geography (1st edition)*. Amsterdam: Elsevier.
- Kobayashi, A. ed. 2020. *International encyclopedia of human*

- geography* (2nd edition). Amsterdam: Elsevier.
- Latham, A. 2003. Research, performance, and doing human geography: Some reflections on the diary-photograph, diary-interview method. *Environment and Planning A* 35: 1993-2017.
- Latham, A. 2016. Respondent diaries. In *Key methods in geography* (3rd edition). eds. N. Clifford., M. Cope., Gillespie, T. and S. French, 157-167. London: Sage.
- Linn, S. 2021. Solicited diary methods with urban refugee women: Ethical and practical considerations. *Area* 53: 454-463.
- Marcu, S. 2021. Almost paradise: A floating sense of place through transient mobility among Romanians in the Canary Islands (Spain). *Mobilities* 16: 356-372.
- McGregor, J. 2005. Crocodile crimes: People versus wildlife and the politics of postcolonial conservation on Lake Kariba, Zimbabwe. *Geoforum* 36: 353-369.
- McGuinness, M. 2009. Putting themselves in the picture: Using reflective diaries in the teaching of feminist geography. *Journal of Geography in Higher Education* 33: 339-349.
- McGuinness, M. and Simm, D. 2005. Going global? Long-haul fieldwork in undergraduate geography. *Journal of Geography in Higher Education* 29: 241-253.
- Mendoza, C. and Morén-Alegret, R. 2012. Exploring Methods and Techniques for the Analysis of Senses of Place and Migration. *Progress in Human Geography* 37: 762-85.
- Meth, P. 2003. Entries and omissions: Using solicited diaries in geographical research. *Area* 35: 195-205.
- Meth, P. 2004. Using diaries to understand women's responses to crime and violence. *Environment and Urbanization* 16: 153-164.
- Meth, P. 2009. Diaries (video, audio or written). In *International encyclopedia of human geography* (1st edition, Volume 3). eds. R. Kitchin and N. Thrift, 150-155. Amsterdam: Elsevier.
- Meth, P. 2020. Diaries, handwritten, online, audio, or video. In *International encyclopedia of human geography* (2nd edition, Volume 3). ed. A. Kobayashi, 295-300. Amsterdam: Elsevier.
- Meth, P. and McClymont, K. 2009. Researching men: The politics and possibilities of a qualitative mixed-methods approach. *Social & Cultural Geography* 10: 909-925.
- Middleton, J. 2009. 'Stepping in time': Walking, time, and space in the city. *Environment and Planning A* 41: 1943-1961.
- Morrison, C. A. 2012. Solicited diaries and the everyday geographies of heterosexual love and home: Reflections on methodological process and practice. *Area* 44: 68-75.
- Murray, L. 2009. Looking at and looking back: Visualization in mobile research. *Qualitative Research* 9: 469-488.
- Myers, J. 2010. Moving methods: Constructing emotionally poignant geographies of HIV in Auckland, New Zealand. *Area* 42: 328-338.
- Park, C. 2003. Engaging students in the learning process: The learning journal. *Journal of Geography in Higher Education* 27: 183-199.
- Qviström, M., Fridell, L. and Kärrholm, M. 2020. Differentiating the time-geography of recreational running. *Mobilities* 15: 575-587.
- Thomas, F. 2007. Eliciting emotions in HIV/AIDS research: A diary-based approach. *Area* 39: 74-82.
- Tuan, Y-F. 1974. *Topophilia: A study of environmental perception, attitudes and values*. London: Prentice Hall. トゥアン, Y - F. 著, 小野有五・阿部 一訳 2008. 『トポフィリア——人間と環境』筑摩書房.
- Vanolo, A. 2014. Locating the couch: An autobiographical analysis of the multiple spatialities of psychoanalytic therapy. *Social & Cultural Geography* 15: 368-384.

A Note on Diary Research in Geography: Design and Practice of a Research on Mobile Dwellers' Sense of Place

SUMIYOSHI Kodai (Graduate Student of The Univ. of Tokyo)

This paper reviews the use of diaries in geographical studies and details the process from design to the analysis of the ongoing diaries-based study conducted by the author. Additionally, it discusses challenges and potential of diary methods, especially in regard to “solicited diaries.”

Through a review of previous studies, it can be concluded that there are four advantages of the diary method. First, it can capture habitual behaviors that tend to be overlooked by respondents. Second, it makes it possible for researchers to simultaneously track multiple people and locations. Third, it enables the keeping of continuous records in a way that ensures accuracy, as opposed to relying on statements based on memory, which are often collected through in-depth interviews. Fourth, solicited diaries, in which researchers encourage participants to write about certain themes, are better suited for exploring individual thoughts and feelings. Respondents themselves share some of the researchers' interests, while focusing on and recording their personal thoughts in a self-reflective manner.

Recently, while studies utilizing these advantages have been flourishing in geography, in Japanese geography, the use of diaries has been limited to historical geography or physical geography, which analyze diaries as already written, historical records. This can be attributed in most part to research that is less feasible due to the heavy burden on respondents, the great diversity of entries, and the lack of there being an appropriate methodology established for analyzing the collected qualitative data.

In the study by the author, it was possible to collect diaries by working with companies to provide incentives and by forming rapports with respondents through various means. However, collected entries showed differences in expression among respondents and many changes over time, and this created difficulties in terms of analysis and interpretation. Therefore, in order to clarify the process of qualitative analysis, which had been ambiguous in previous studies, Steps for Coding And Theorization (SCAT) was used. This made it easier to explicitly indicate the reasons for focusing on particular words and phrases in the diary and to consider the theoretical background. However, it also revealed a challenge: the themes of the diaries were changing daily, making it difficult to put them into a consistent context. In the future, a study should be developed to exploit the strengths of diaries by further refining the procedure of analysis and supplementing the data itself with other information sources, such as interviews.

Key words : diary, solicited diaries, qualitative method, sense of place, multi-habitation

